



## いつまでも『自分でためしてみたまえ!』



当所お隣さんのガクアジサイ

### うまく検索できない?

たまたまと思いきや、ネットで情報をうまく検索できない女性が意外に多いよう。SNS利用が主流になり、検索への関心が薄くなったせいかもしれません。たいていの情報はネットで情報収集できるので、ほとんどの人がそうしているだろうと想定して、個別の相談などにあたってきましたが、それではダメかも、と感じる昨今です。

2018年も半分が過ぎようとしています。世界が注目した6月12日の米朝会談も無事に終わり、世界のパワーバランスが今後どう変わっていくのか、来年の今頃にどうふり返っているか、たのしみなような、こわいような。

時流を観察することは仕事の一環でもあります。先月ふと思立ち、1945年を100年さかのぼってみました。いつもは1945年からの100年をみっていますが、その100年前1845年からはどうだったろうと。

いまは本当に便利になりました。手元のスマホですぐに歴史年表をみることが出来ます。まずは1845年から100年みて見たわけですが、あれが、この年だったのか…、ということは伏線はその前になるわけで…と、結局、いま現在をたどると、1845年からさらにその100年前、1760年代の「産業革命」にいきつく。

世界がいったん〈ご破算〉になった1945年からの100年は、ネット・A Iの新生「産業革命」の時代と言えて、2045年にそれが極まる「シンギュラリティー」を迎えると言われていますが、まるで1745年からの200年の道を辿っているようにも見えてきました。

とはいえ、先のことは後生に任せ、2045年までを視野にいれるとして、『ライフシフト』という本が出て以来、「人生100年時代」は人々の意識を確実に変えているようで、人生の〈後期〉をどう過ごすか、考え、動く人たちに出会うことが増えました。

誰でもいずれ終わりがくるのですから、その時に“ま、それなりにやったなあ”と思えば一番しあわせではないでしょうか。500年前の先達「モンテニュー」が現代のわたしたちを励まします。自他ともに世界は未知、さあ、『自分でためしてみたまえ!』

## 「見聞感考」『真説 孫子』が光をあてる「老子」

土曜に掲載が移った日経の「書評」。日経は文化面の質が高いように以前から感じています。『書評』も毎週チェックを逃しません。

4月のある週は『真説 孫子』に注目。「孫子」はあまりにも有名で、『兵法』もざっくりとした解説本は読んだことがあり、少しは〈知ってるつもり〉といったところ。

そこへ〈真説〉とうたわれると、読んでみようかという気になるものです。書評もそれをそそりました。実際に読んでみると、新鋭の研究者という感じの著者の言説が小気味よく、伝えようとするのがよく理解できて、読書の甲斐がありました。

でも一番よかったのは、「老子」に光があたっていたこと。その『道德経』もまた兵法だということです。

つかみどころのないようで、自分の中にすでにあることを説く印象の「老子」。「兵法」とつなげてみることは全くなかったのも、興味がわき、さっそく調べて、選んだ本が2冊。

『老子訳注 帛書「老子道德経」』（小池一郎）、『井筒俊彦英文著作翻訳コレクション（1）老子道德経』

まだ前書を読み始めたばかりですが、2冊を読み終えた時には、何かしら世界の見え方が変わるの間違いのないような、そんな予感がしています。

道徳経第十四章「小池（一郎）訳」  
目を凝らしても見えて来ないものを、名づけて「微妙」と言う。耳を澄まして聞かぬ来ないものを名づけて「希（まれ）」と言う。触るうとしても触れないものを、名づけて「夷（たいら）」と言う。これら三つのものは、測り知ることができない。（略）